

第4回 初めての古文

学習時間

40分

学習日

月 日

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

筆者が中学二年生のある日、国語のヤダ先生は、生徒たちにいきなり古典を読むように言いました。「読めない」とさわぐ生徒たちに、「わからないところは適当におきながら、自分の読みたいように読めばいい」と言うのです。そのとき筆者が選んだのは『蘭学事始』という本でした。

①『蘭学事始』は、江戸時代の蘭学者杉田玄白が、日本で初めて西洋の解剖書をオランダ語からほんやくしたときのことを、そのときの苦勞や工夫を、回想しているお話です。蘭学というのは、*鎖国をしていた間に、西洋の国では唯一交わりのあったオランダから日本に入ってきた学問のことです。

西洋の解剖書の人体図は、東洋医学の人体図とはあまりにちがうので、実際の「*腑分け」を見たくなり、刑場へ行つて、刑死人を解剖してもらいながら、図のいちいちを確かめたとか。辞書もない時代のほんやくだから、ひとつのことばをやくすのに、長い間あれこれと考えたとか。

たとえば、解剖書の「鼻」のところまで出てきた「フルヘツヘンド」ということばがわからなくて、みんないろいろ考えるわけです。何々べし、とか、何々なり、とか、古文はちんたら

してまずけどねえ、ヒトが一所懸命考えてるつてのは、どんな古文でも、何語でも 伝わってくる。

玄白たちがみんな一所懸命考える。辞書なんかないからどうにもわからない。そこへ仲間のひとり、ペラペラのパンフレットみたいな辞書を、*長崎から持ち帰る。それによると、フルヘツヘンドとは「木の枝を切り落とすと、切ったところがフルヘツヘンドする。庭をそうじすると、ゴミや土があつまつてフルヘツヘンドする」。

それでまたいろいろこじつけ考えあううちに出てきたのが、木の枝を切ったらそのあとは「もりあがる（うずたかくなる）」、そうじしてゴミがあつまれば「もりあがる（うずたかくなる）」、ということばは、「鼻は顔のまん中で（A）」いるものだから、フルヘツヘンドは『うずたかい』という意味じゃないか」という答えにたどりついたときの感動は、どきどきと伝わってきて、いまだに、ありありと覚えています。

てきとうに現代ことばに置きかえて、わかんないところは好き勝手に置きかえて、ホンヤクし終えた「初めての古文」で書いた。ホンヤクしたものはろくな出来じゃなかったと自分でも思っていたけど、少なくとも、中二のあたしには、古典は読める、どんなに読めなくても読んじやうことばはできる、という自信がついたわけでした。

わかんないことばを、がむしやらにつきとめようとする熱意。あの古文の授業で、たまたまでしたけど、そういうものに、出会っちゃったわけです。そしてほんとにたまたまなのかもしれないけど、それ以来、あたし自身も、そんなふうにならに、生きています。あのときあたしが選んだのが、*源氏物語』とか、『方丈記』とかだったら、生きかたもまた変わっ

今回の問題文
このとき古典を読んだ経験は、筆者の生き方についてのいきいきをあたえたのだろう。

問一 ①、この本に書かれているのはどのような内容ですか。文中の言葉を用いて三十字以内で書きなさい。

問二 ②、「図」とは何ですか。文中から十字で書きなさい。

問三 ③、このとき、筆者には何が伝わってきたのですか。簡単に書きなさい。

問四 (A) に適切なことばを文中のことばを用いて六字で書きなさい。

問五 ④、「初めての古文」をほんやくし終えた筆者の気持ちとして適切なものを次の中から一つ選び、記号を○で囲みなさい。
ア うまくほんやくできなかったことを残念に思っている。
イ わからない言葉の意味がわかってうれしく思っている。
ウ 自分なりに古典が読めたことで自信を持っている。
エ わからない言葉が多く、古典がいやになっている。

ていたのかなど、ふと思います。

実は、あたくし、今の職業は詩人です。

それで、仕事の上で、古典を読まなくちゃいけないことが、たびたびあります。古典を専門に勉強する学者ならともかくも、詩を書くのが専門の詩人ですから、わからないことばがあるんです。それはもう、いっぱい。

するとそこにヤダ先生の声が聞こえるんです、今でも、生々しく。

「わかんないところは適当におぎなって読んじまえ」

「原文どおりじゃなくてもいいんだ、自分が読みたいように読めばいいんだ」

そのとおり、先生の言ったとおり、あたしは今、古典を、自分が読みたいように読んでいます。楽しく読めるんです。それがまた。

*鎖国Ⅱ江戸幕府が、日本と外国の外交・貿易を制限した政策のこと。
*腑分けⅡ解剖のこと。

*長崎から持ち帰るⅡ長崎の出島は、日本が鎖国をしていた間、オランダと貿易できる唯一の港町となっていた。

*『源氏物語』Ⅱ平安時代に書かれた物語。有名な古典の一つ。

*『方丈記』Ⅱ鎌倉時代に書かれた随筆。有名な古典の一つ。

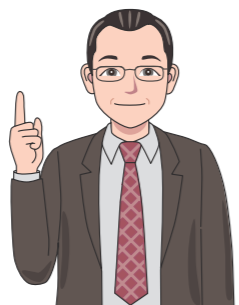
自由作文



問題文には、江戸時代に生きた杉田玄白たちが、外国のことばを一所懸命ほんやくしているすがたがえがかれていました。そのすがたにえいきょうを受けた筆者の思いも述べられていましたね。

今回の自由作文では、自分とことばとのかかわりを考えます。自分にとって印象に残っていることばを思いうかべ、考えたことについて文章を書きましょう。

取り上げることばは、だれかに言われたこと、本の中に出てきたもの、習ったことわざなど、どのようなものでもかまいません。心に残っていることばを思い出してみてください。



問一

(1) 今までふれてきたことばの中で、印象に残っているのはどのようなことばですか。

Blank writing area for question 1.

問六

⑤、筆者は何に出会ってしまったのですか。文中から二十七字で書きぬきなさい。

Grid writing area for question 6.

問七

⑥、今、筆者は古典をどのように読んでいますか。文中の言葉を用いて書きなさい。

伊藤比呂美『あのことば、先生がいた。』
(理論社刊)

答えは『答えと考え方』

(2) なぜそのことばが印象に残っているのですか。そのとき自分が置かれていた状況や、そのときの思いなどを具体的に書きましょう。

Blank writing area for question 2.

問二

そのことばはあなたにどのようなえいきょうをあたえましたか。そのことばによって変わったことがあるか、ふり返ってみましょう。

Blank writing area for question 2.

答えは『答えと考え方』